

(1) はじめに

演者は、江戸時代中後期の京都人「神沢杜口」の主著『翁草』の記載内容の考察・検証などを行っている。

一昨年初、杜口命日に菩提寺「慈眼寺」において、杜口の俳句から研究を始められた関西大学文学部大学院聴講生「奥野照男(82才)」氏と懇意になり、現在では共に連携して杜口研究を進めている。

一昨年、奥野氏は、昭和63年(1988年)に一度発見され、その後、行方不明になっていた翁草の杜口自筆原本を再発見され、これを各視点から研究されている。

その研究成果を紹介すると共に、演者の私見なども述べたい。

(2) 再発見の経緯

そもそも再発見の発端となったのは、奥野氏が神沢杜口末裔の木村家において、資料①の京都新聞記事を見せられたことにあった(奥野氏は、元々、杜口の俳句の研究をされていて『其蝸庵[きちょうあん]杜口発句集詳解』という著書もあり、木村家と交流があった)。

新聞には、龍谷大学文学部「宗政五十緒」教授(2003年没)により、杜口の実家の子孫(入江家)宅から『翁草』の杜口自筆原本が発見されたことが書かれていた。

まず、奥野氏はこの記事に興味を引かれ、記事中にある枚方市に住む入江信男氏を訪ねてみたが、いつの頃からか入江氏宅は無くなっており、周囲の民家に事情を尋ねても不明であった(不審者と思われ、素気なくされた感もある)。

また、この著者自筆原本(以下、入江家本)に関する宗政教授の調査報告、あるいは研究論文を各方面で探したが見つからなかった。(資料②、注①参照)

ここで行き詰まった形になったが、知人より「法務局で不動産登記簿謄本を閲覧すれば何か判るかもしれない」との情報を得て、さっそく調べたところ、入江家は東京都武蔵野市に転居していたことが判明した。

そこで、奥野氏は入江家に連絡を取ったところ、すでに新聞記事当時から31年が経過、信男氏は死亡しており、入江家本は信男氏の甥に相続されていたことが判った。

信男氏は重要な文書ということで、自費による補修なども行っていた(従って保存状態は極めて良好である)が、再発見時、二百巻中、巻百六～百十の五巻が欠本していた。これはついでには、信男氏が貸し出した際、返却がなされなかった可能性もあるとのことである。

注① 今春、演者が今回の再発見を京都市歴史資料館に報告に行ったことから、発見当時、宗政教授の近くに居た研究者が見つかり、当時の様子を知ることができた。それによると教授は当時、我国最初の活字である「圓光寺の木活字」の研究に注力していた(重文判定も担う)。その後、大病を患われた。嘱望されていた弟子が急死してしまった。などにより、やはり発見に関する報告・論文を表す機会を失ったかと思われるとの見解であった。

(3) 入江家本が著者自筆原本である根拠・理由

その後、入江家本の公式な調査報告、あるいは論考・考察などが見つからなかったことから、奥野氏は居住地の大阪府高槻市から東京の入江家を度々訪問し、入江家本を再調査した。

その結果「出所、筆跡、押印、構成(序・跋など)、使用用紙」などの考察から、入江家本は神沢杜口自筆原本で間違いのないという結論を得た。

1. 出所

なんと言っても、入江家本が杜口生家の入江家(杜口は10歳の時、入江家から神沢家に養子に入った)で、代々継承されてきた事実は大きい。

また、『翁草』の続編に相当する『塵泥（ちりひじ）』の杜口自筆原本は、神沢家末裔の木村家に伝来している。

また、現在、杜口自筆であることが唯一認定されている京都学歴彩館（旧京都府立総合資料館）蔵『赤城義士篇参考』も一時、上京「瑞光院（赤穂浅野家の祈願寺）」に預けられていたことが判っている。

以上の事実から「天明の大火（天明8年：1788年）」で多くの書籍・本稿・草稿を焼いてしまった杜口が、それらを各所に預けることで、今日で言う「リスクの分散」を図ったのではないだろうか？と考えられる。

更に奥野氏の墓石・過去帳調査で、元禄以後の約150年間に神沢家・入江家、相互間で3人が婚姻・養子縁組など、何らかの姻戚関係を結んでいたことが判明した。

近年では、両家は互いの存在を全く知らなかったが、杜口在世当時は親密な姻戚関係にあったと思われる両家に、各原本を託したのだろうと考えられる。

2. 筆跡

前項でも触れたように、京都学歴彩館蔵の『赤城義士篇参考（安永四年[1775年]成立：以下、義士篇）』は、杜口自筆本であることが唯一認定されている。この書は、一度、天明の大火で焼失したが、洛西善峯寺に預けてあった初稿（二十四巻）を取り寄せ、二巻を追加し二十六巻として、寛政四年（1792年）春に杜口自身が書き直したものであり、全巻同一筆・同一用紙である（この文書は学歴彩館においてデジタル化されていて、誰でも閲覧可能）。

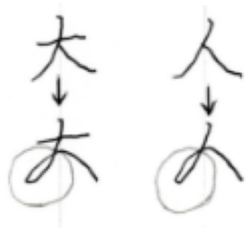
自筆本認定理由としては、序文や跋文に「自らが書いた」という意味の署名捺印（3箇所）や杜口独自の冠帽印（特に資料④のC印。冠帽印とは、書や絵画などの作品が完成した際に押す落款印。その中でも、作品のはじめに押す印）があることが最大の理由だと考えられる。

奥野氏は主に、この義士篇と入江家本を比較検討する手法を採用された。

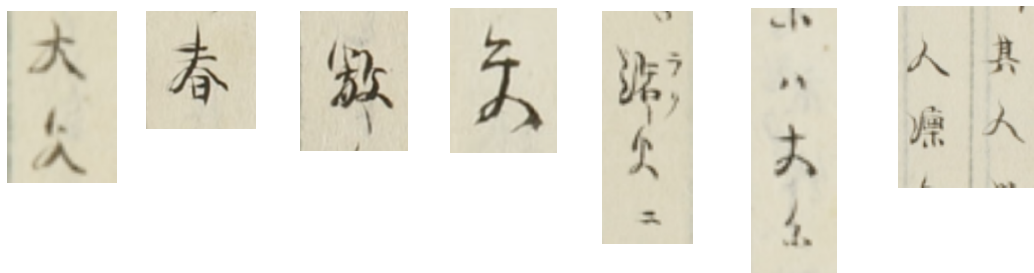
まず筆跡だが、幸いなことに前出の宗政教授も「筆跡にくせがある」と述べているように、かなり個性的な筆跡なので、どちらかというかと判別し易い筆跡と言える。

義士篇の序と入江家本の序を比較すると、奥野氏は、杜口の筆跡には次のような特徴があると分析された。（資料③参照）（以下、特段の記述がない限り、奥野氏の調査結果・見解）

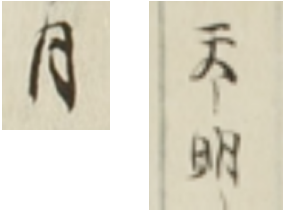
●「大」「天」「人」等左右へ払う筆は、左へ払った後一筆書きのように、上に回して続けるところに特徴がある。



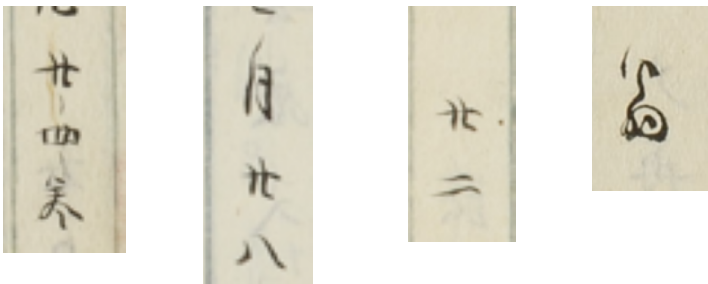
●「夫」「火」「又」「入」「人」「奏」等は、この形（上に回して続ける）となる。



- 「月」は右下へ下し、刎ねた後、上横棒を二本入れるべきが、一本となる特徴がある。



- その他「四」「廿」「翁」等は特徴のある字体である。仮名の「の」も上に突き出る特徴がある。



資料③の義士篇の序と入江家本の序を比較すると、両書の筆跡は上記特徴と矛盾しないことが判る。『翁草』の続編に相当する、全四十七巻が同一筆・同一用紙の『塵泥』の筆跡とも矛盾しない。

しかし、資料①の記事を読むと、いかにも全文が杜口自筆のように錯覚してしまうが、入江家本『翁草』195巻中には、どのような理由でかは不明だが、杜口の筆跡ではないと判断できる巻がある。現在、巻十六、巻十七、巻七十九～八十二、巻八十九、巻九十九の前半が、他筆であると確認しており、更に存在すると推測できる（これについては、現在、調査中であるが、宗政教授は、この他筆の部分の調査、及び理由解明などに手間取るうちに、論文発表する機会を失ってしまったのではないかと、演者には考えられなくもない）。

3. 押印

入江家本には、資料④の八つの印があり、これらの印章は杜口独自のものであり、これらが押印されているということは、杜口の自筆、杜口の所有、杜口の承認などを表すと判断でき、当然ながら写本には押印できないし、押印されている写本は、管見の限り発見されていない。

この八つの印の内、C～Hの六つの印は義士篇にもあり、印影を比較するに、同じ印章を使用していると判断できる。（資料④参照）

資料⑤と⑥は、C～Hの印が、入江家本、義士篇のどこに押印されているかの一例である。

入江家本の各巻の冒頭（本文又は目録）には、必ず印が押されており（無印は巻一、二、五、六の四巻のみ）、その押印の仕方は大きく分けて印A Bの組み合わせと、印C Dの組み合わせの二種類である。A Bが四十二巻（他にAのみが二巻）、それ以外の百四十七巻は総てC Dであるが、この違いが何を意味するのかは、現在、不明である。Bの印に一つのヒントがあると考えられるが、現在のところBは判読できていないので、この違いの理由は不明である。

また、自筆でない巻も存在するが、その場合でもA B C Dのどれかの押印があるので、他筆でも杜口自身が原本として承認したものと判断できる。

4. 構成（序文、跋文〔後書き〕、奥書）

前半（巻壱～巻百）の冒頭には、下記がある。

- ・①那波魯堂（なわろどう）序（安永五年丙申正月） 二編（実質一編）
- ・②神沢杜口自序 一編

この二つの序はどの写本にも写されているので、よく知られているものである。

後半（巻百一～巻二百）の冒頭には、下記がある。

- ・③西山拙齋、④伴藁蹊（ばんこうけい）、⑤同塵館主人、⑥五升庵蝶夢の四編
- ・神沢杜口奥書（最後に杜口の奥書がある）

入江家本には、序、跋が七編ある。那波魯堂の序は同じ物が二編で、一編が清書、他の一編は下書きと考えられるので、実際には六人六編である。『翁草』の写本は数多く現存する。その全ての写本を調べた訳ではないが、序、跋が六編も掲載されている『翁草』は少なく、特に、下記③西山拙齋、④伴藁蹊、⑥五升庵蝶夢の序（あるいは跋か？）は、ほとんどの写本には無い。

さらに、③西山拙齋、⑤同塵館主人が、自らの印を押印している。入江家本が写本であれば、これらの印を押すことはまずできない。「原本ならでは」である。

5. 使用用紙

杜口唯一の自筆本とされてきた義士篇（全二十六巻）は、天明大火で焼失、寛政期（1789～01年）になって書き直されたので、全巻杜口の筆跡、使用用紙も全巻同じである。また、同じ寛政期に書かれた木村家蔵の『塵泥』も、全て同一用紙で書かれており、この事から寛政期の杜口は、主にこの用紙を使っていたと考えられる。この用紙をA1（仮称）とする。

これに対し、入江家本は、二十年以上に亘って書き継がれているので、十種類近い用紙が使われている。これは原本ならではの大きな特徴である。入江家本では、このA1の用紙が最も多く使われ、巻百五十以降の、寛政期に書かれたと思われる部分と、巻百以前の所々に使われている。この百巻までの部分にあるA1の用紙で書かれた部分は、天明大火で焼失した部分を、寛政期に書き直した部分と考えられる。

入江家本に使用された用紙の種類を巻別に表示すると資料⑧のようになる。この表には印の種類も記しているが、この表から次のような事が言えると考えられる。

入江家本を書き始めた頃はA2（仮称）の用紙を使っていた。百巻前後でこの用紙が尽き、B2（仮称）の用紙を使ったが、大火で一部を焼失、以後寛政期に、A1の用紙を使って焼失部分を書き直しながら、二百巻迄書き進めたと考えられる。

これを図示すると下のようになる。

| 巻一 | 巻百 | 巻二百 |
|----------------|------------|----------------|
| A2 1 …… …… …90 | | |
| B2 | 98 …… …145 | |
| A1 …… …… | | 149 …… …… …200 |

那波魯堂の序（上記4. 構成の①）と杜口自序（4の②）は安永期（1772～81年）に書かれたが、天明大火で焼失、寛政期にA1の用紙で書き直された。杜口自序には印があるが、魯堂は既に故人になっているので印は無い、と考えられる。魯堂の残る一編は下書きと考えられる。

西山拙齋の序（4の③）は寛政四年（1792年）なので、用紙はA1、又同塵館主人の序（4の⑤）も焼失し、書き直されたので、用紙はA1と考えられ、拙齋も同塵館主人も寛政四年時点で生存しているので、印が押されていたと考えられる。

以上、現存する序や跋の状況と来歴を、使用用紙から推定して矛盾はないと考える。

(4) 原本確認の意義

自筆原本の意義として、原本から新たに判明・推定・推測できることがある。そして多くの新たな疑問点も浮かび上がってくる。また、写本との相違を比較検討でき、写本の系統が探求可能となる。

1. 『翁草』成立時期の新しい見解

『翁草』は明和期（1764～72年）に百巻が成り、天明の大火（天明8年正月：1788年）の直前にもう百巻が完成、大火で一部焼失、というのがこれまでの定説であった。この説は那波魯堂の序、及びこれを受け継いだ西山拙斎の序が根拠になっているが、少し疑問がある。まず二百巻まで完成しておればもっと話題になっていた筈である事。又、大火後焼け残った中に、百五十巻以後のものが一つも無い事から、天明大火の時点で、『翁草』つまり入江家本は、百巻程度しか書かれていなかったと考えられる。

使用用紙のまとめ資料⑧から判断すると、天明大火で焼失した部分は、百二十二巻迄の内、A1の用紙で書かれた二十三巻分と考えられる。

又、巻百十には天明八年（1788年）夏の田沼意次失脚の記事がある事から、『翁草』は天明大火の時点で巻百七辺りまでは書かれていたと推定する。

これを裏付ける資料として、内閣文庫蔵『翁草』巻百一の前には、「明和の時期に百巻程度が書かれ、一旦筆を停めて天明七年に再開」という記事があり、さらに同塵館主人の序にも、「百餘巻まで書いて大火に遭遇」とある。これらを考え合わせると、『翁草』は天明大火の時点で、百十巻程度までしか書かれていなかったと考える。

2. 資料としての意義

今日、『翁草』の写本は、かなりの量、全国の研究機関や大学の図書館に残っているが、写本の現存数では『源氏物語』が屈指の数量を誇っている。

奇しくも、奥野氏が入江家本を再発見した2019年、「藤原定家」筆による源氏物語『若紫』巻の写本が東京で発見され、定家の子孫「京都の冷泉家」により定家自筆と認定され、大きなニュースとなった。

「紫式部」自筆の原本は、もはや出現不可能とされているので、現存する写本としては最古とされる定家自筆本が、現在では原本に匹敵する価値を与えられている。

あまた現存する源氏物語の写本には系統があつて、平安時代の諸写本が、鎌倉時代に河内本、青表紙本（定家自筆本）などに統合され、青表紙本が室町～江戸時代に大島本、三条西家本、青表紙諸本に別れた。

そして現在、我々一般市民が市販本で読む源氏物語は、ほとんど全てが大島本である。

また、各写本は、何しろ「手書き」なので、誤転写が数多く発生し、細部でかなりの相違が見られる。記述によって解釈が微妙に、場合によっては大きく異なってくる。

以上は翁草においても事情は類似していて、現在、市販本で読める翁草は、明治38年、池邊義象（いけばよしかた）博士が『藤井五車楼本』『富岡鉄斎所蔵本』『京都府立図書館本』を校合し、翌年、活字印刷した、言わば『池邊本』とも言える近代の刊本である。。

しかし、翁草写本は源氏物語のように系統研究など全くされていないので、今回、著者自筆原本が世に顕れてきたことにより、この方面の研究が進む可能性がある。

すでに奥野氏は、翁草写本においても系統がありそうだと述べている。

次に各写本の記述の相違については、資料⑦は、演者が調査した結果だが、巻117「本阿弥の話」に登場する「本阿弥光二」などは、原本、及び史実は「光二」なのだが、何故か「光正」と誤写してしている写本が多い。この例など、近年「明智光秀」研究が盛んになっているだけに軽視できない。

しかし、巻38「鬼丸の太刀の事」に登場する「本阿弥光成」は、史実は「本阿弥光徳」だが、原本の段階ですでに異なっている（光徳が光成と名乗った記録はない）。

また、現在、翁草の印刷された市販本には、昭和6年刊「日本随筆大成（日本随筆大成編集部編）」と、昭和45年刊「近世史料叢書（歴史図書社）」に収められたものがあるが、これらの元（底本）となっているのが、明治39年に活字出版された「池邊義象」校訂の翁草（以下、池邊本）である。

- ・池邊本の巻九十九「家光公御上洛の記」は、入江家本では巻百の前半に、
 - ・池邊本の巻百「明正帝御即位記」は、入江家本では巻九十九の前半と巻百の後半に2ヶ所、
 - ・池邊本の巻百二十「東照権現御遷座の記」は、入江家本では巻九十九の後半に、
- それぞれ書かれている。この違いはどうしてなのか？ 未解明だが興味深いものがある。

また、与謝蕪村研究で有名な「藤田真一」関西大学名誉教授は「芭蕉と蕪村の奥の細道」（「目で見える江戸俳諧の真髓展」記念講演会・2009）の終盤、文人画家である蕪村筆「おくの細道」画卷の、壺碑（多賀城碑）の場面について、

—蕪村は「壺碑」について、どこから正確な知識を得たのでしょうか。…中略…この情報源を探っているとき、こんなものにぶつかりました。神沢杜口の『翁草』にみえる記事です。この本は江戸時代に出版されることはなく、ごく一部だけは出版されていますが、明治の終わりころ、ようやく活字本になったものです。…中略…ともかくこの『翁草』のなかに、ほぼそっくりの記事が出てきます。これを目にしたとき、蕪村の情報源はこれだったのかと、すぐにひらめきました。比べてみると若干の省略や異文があるけれども全体の構成や文章はうり二つなのです…中略…異文というのはわたくしが手にした活字本（日本随筆大成『翁草』、※演者注→上記「池邊本」）と食い違っているという事です。以下略—

『翁草』で「壺碑」に付いては、巻四十八「壺碑の事」と、巻百十七「雑話」の「多賀城壺碑」の2ヶ所に書かれている。上記「若干の省略や異文」というのは、入江家本との照合で解決した（つまり、杜口と友人関係にあった蕪村が情報源にしたのは、入江家本であった）。

（5）最後に

以上、新たに判ったことも、疑問点・検討事項も共に多いが、自筆原本により、翁草の研究、引いては神沢杜口研究の原点が定まった。

今後、この原本を中心として、神沢杜口と彼の作品の研究が、展開、進展する事が期待される。そのためにも、義士篇のようにデジタル化して、広く公開されることが望ましいと考える。

また、杜口は「俳人」でもあり、翁草・義士篇・塵泥のような散文だけでなく、生涯に渡って俳諧の著作も多い。優れた俳人とは言えないかもしれないが、明治時代までは与謝蕪村などと並んで、文学関係者の没年一覧表に名前が見られる。

従来、杜口については、俳諧は俳諧、随筆・評論・記録と言った散文、別々にある程度研究されてはきたが、杜口の人間性を知るには、両方を同時に見ていく視点が必要だと考える。